



歴史教育について論議を

佐藤光

「侵略」か「進出」かで、大騒ぎとなつた教科書問題も、実は、今回の検定で書き改めさせた事実は全くなかつたのを、あつたかのごとく報道した大新聞やテレビの誤報が火元であつたということで結末を告げた。

しかし、考えてみると、教科書問題は、今に始まつたことではなく、戦後ずっと続いてきた問題である。占領軍の指示で墨でまつ黒に塗りつぶされた教科書で戦後の教育が始まつてから、教科書は不幸な運命を迎ることになつたのである。特に修身教科書は教育勅語に、歴史教科書は皇国史観に基づいたものとして、きびしく断罪された。修身（道徳）教科書は、ついに陽の目をみることがなかつたし、自由出版となつて現れた歴史教科書は、皇国史観に対する極端な反動として、唯物史観のものが多くなつた。支配階級の圧政・抑圧・搾取と、人民の困窮と反抗、百姓一揆、対外侵略戦争と暴虐、文化の後進性……が強調され、極端に言えば、日本民族は、父祖代々、犯罪的行為と過誤ばかり繰り返してきたことになつた。その他の社会教育も、資本主義は悪玉といったような議論がまかり通ることになつた。

これではあまりひどいのではないかといふ批判が高まり、三十年頃、いわゆる「憂うべき教科書」問題として大きな政治問題になつたほどである。文部省の検定制度は、このようないかがつて、その方向は、教科書のかた

よりをいくらかでも食い止めようとする方向へ働き、この力のぶつかり合いが、今日まで続いているとみてよいであります。十数年に及んだ「家永教科書裁判」は、その象徴でもあります。この事件は、戦後、急転回したような人もものであつたが、過去と現代の日本をことごとく悪しきまに描いてみせ、唯物史観を中心とした教科書の典型を見事に作つてみせた例ともいえよう。

ところで、文学者の三浦朱門氏が、「歴史教科書を専門家から取り上げよう」（中央公論・十月号）という、興味ある論文を書いている。学者がアルバイトのつもりで、主觀的恣意でもつて教科書を作られてはかなわないということであろう。教育の現場で、子供たちに教える教師は、学者一人一人の史観とは別に、「自国の歴史を次代に伝える目的はなんであるのか」「自國に対する悔蔑や嫌悪感を植え付けるために歴史教育を行つてよいものかどうか」について、教育という営みの原点に立ち返つて、考えてみる必要があるのではないか。自國の歴史をどのように子供たちに教えるべきか」を問題にした議論が、教育界に大いに起つてほしいものである。それには單に、歴史教育を担当する教員ばかりではなく、教壇に立つて次代を教えるほどの者は、みな関心を持つべきことと思われるからである。

（さとうひかる・福島県文化センター
館長）